

インターネット英語の語彙力増強への学生の意欲に関する一考察 — 認知的体系学習に基づく指導の試み —

高橋 信弘

Increasing students' motivation in building Internet English vocabulary — a perspective from an experimental teaching based on the Cognitive-Code Learning —

Nobuhiro Takahashi

Abstract

The objective of this study was to prove a hypothesis (of the author and the colleague) that students' motivation to enhance their vocabulary of Internet English expressions and terminology might be more promoted when they engage in what we call the Cognitive-Code Learning rather than they devote most of their time to rote memorization and repeat pattern practices. By the term the 'Cognitive-Code Learning' the author means a way of learning by comprehending the system and the rules of a language and by exercising natural use of the language at the same time.

Our team designed a teaching syllabus comprising aforesaid two elements for the students of Bunkyo University; two classes of 2nd grade IT Department students; the two and half month course from the middle of April 2004 to the end of June; one lesson a week for 90 minutes; 20 minutes for comprehension of general vocabulary, 20 minutes for practice of using those, and 40 minutes for Business English including business/technical vocabulary.

As the lesson proceeded we noticed the students became digestive with the vocabulary of Internet English relatively soon and easily. The reason we found was that they spontaneously realized a fact: except a group of particular terms (mostly technical) nearly all words for Internet English expressions are nothing but those in general vocabulary.

- ① The students' learning motivation changed as referred in the Table 27; the students' favor rating for dictation was 2% and that for speech was 6% in April, and towards the end of June the same marked 12% for dictation and 14% for speech.
- ② The students indicated their recognition about vocabulary building, dictation, and speech as follows.
 - ・ "I find myself attending the lesson more vividly when I am following the structure and the meaning

or the significance of words rather than I am struggling to learn by heart their spellings and the meaning in Japanese.

- “Dictation drills stimulate me to remember more English words and sentence patterns.”
- “I guess I’m certainly more capable of commanding oral English after I got in the habit of capturing vocabulary by comprehending their meanings with their spellings.

The above ① and ② seem to explain the fact that teaching by comprehension of vocabulary together with the actions such as dictation and speech distinctively worked out as a source to enhance the students’ motivation for learning.

So the author assumes its hypothesis was thus proved; learners’ motivation is promoted by the cognitive learning along with the using practice of Internet English vocabulary. And also one point appears to be obvious from the experiment conducted and the result. The more students learn general vocabulary, the more effectively they get Internet English vocabulary.

あらまし

1. テーマ設定の理由と本研究の目的

語彙力は、インターネットの英語に限らず、外国語の能力の基本の1つとして必須である。一般に語彙力は、ややもすると大学に入ってから落ちると言われているが、大学に入ってからこそ、将来役立つ語彙、特にコンピューターの専門分野で役に立つ語彙を習得する必要がある。社会の現実がそのことを示している。また、学生の語彙増強の意欲は、大学に入ってからきわめて低くなっているともいわれている。これは特に英語学習の場合に言えることであるが、授業時数が少ない上に、入試という最大の学習動機がなくなっているからである。

本研究の目的は、如上の現状認識のもとに、学生の語彙力増強の一助とすべく、下記の仮説を実践によって証明することである。

仮説：

インターネット英語の語彙力増強への学生の意欲は、暗記や単純な反復練習の積み重ねとしてとえるのではなく、言語規則を認知的に理解して、その言語活動をする認知体系学習から促進される。

仮説を立てた理由は、インターネット英語における語彙習得は、まずインターネットで使用される一般語彙を認知的に理解して、その後、言語使用の練習と実践によってインターネットで使用される語彙を学生本人に定着させるのが自然であると思われるからである。

なお、ここでいう「インターネット英語」とは電子メール (Electronic Mail) 及びWebで使用される英語である。電子メールの英語の語彙とは貿易、輸送、生産に関連したビジネスを交信する語彙である。Webで使用される英語の語彙とはWebやホームページで情報を英語の表現するのに使用された語彙である。また、「認知的理解」とは、ことばを丸暗記するのではない、ことばの語形成や語彙の語源、ことばと文化や社会との関係などを知覚として理解することである。「言語活動」とは「聞く、話す、読む、書く」などの言語使用に関わる活動である。

「認知体系学習」とは外国語学習を、学生自らが、多くの言語情報の中から規則を発見し、その規則を創造的に使用できるようになっていく能動的な過程であると考えられる学習である。

2. 先行研究例

本研究に関係するインターネット英語に関連した外国語教育における語彙の研究としては以下の5つがあげられる。

(1) 外国語教育における語彙の学習の重要性に関する研究

外国語教育における語彙の学習の重要性に関してはKrashen, S(1984), Rivers(1983), Nation(1990), 森住(2002), 相澤(2003)などの研究がある。

Nation(1990)は語彙知識の枠組み(What is involved in knowing a word?)について、語彙指導と語彙学習の目標に視点を置いた。Nation(2001)は1990年にそれ以前に提唱した語彙知識の枠組みを改定し、再編成を行い、3種類の基礎構成を設定している。(1) formとしてspokenとwrittenとword partsに(2) meaningとしてconcept and referents, associationに(3) useとしてgrammatical function, collocation, constraints on useなどである。さらに、上記各事項をreceived knowledgeとproductive knowledgeという両面に分けて18の構成要素から成る語彙の知識体系を提案している。

(2) 英語の語彙の選定に関する研究

英語の語彙の選定に関するものにはJACET4000, JACET8000, 語研1000, 学習指導要領別表などがある。

森住(2003)は学習指導要領別表に現れた指定単語の動向について、1958年から1978年間における語彙数の変遷を以下のように示した。

年代	1958(59)	69(70)	77(78)	89(90)	98(99)
中学校	1100-1300	950-1100	950-1050	1000	900
高校	3600	2400-3500	1600-1900	1900	1300
最大限総計	4900	4600	2950	2900	2200

(3) 語彙のメタ言語的解説による指導の研究、語源、単語の文化的意味などの研究

語彙のメタ言語的解説による指導、語源、単語の文化的意味などの解説による指導には森住(1980), 荒木(1998), 小谷(2000)などの研究がある。

森住(1980)は英語の語彙に関して、語彙をメタ言語から解説して、Saxon系語彙とNorman系語彙、日本語の漢語や和語との比較からの指導を試みている。

(4) 語彙力増強の授業実践研究、参考書などの実践研究

中学や高校の場合の授業実践研究には次重(2001), 大場(2002), 小屋(2002), 相澤(2003)などがある。

次重(2001)は「語彙力を身につける」とは単に語の形式と意味を知っているだけでなく、その語が課している文法的機能、背景的知識などを獲得することとしている。

(5) ESP全体及びESPの語彙研究

ESP全体及びESPの語彙研究をしたものには森住(1991), 森住(1994), 寺内(2001), 馬場(2002)などがある。

馬場(2002)は工業英語検定試験の分析とアンケート結果から専門用語に相当する単語に対する認

識不足、専門分野のフェージーな事柄や用語の知識が不足していることを明らかにしている。

以上、5つの分野にわたって先行研究の主なものを取りあげてきたが本研究のように、インターネット英語とEGPの語彙の関連を研究したものはない。また、インターネット英語の語彙学習の意欲に関して、認知的側面といわゆる言語使用の側面から、大学生に対して行われた実践はない。そこで、上記で述べた仮説を立てて、これを証明することにした。

なお、ここで言うEGPとはEnglish for General Purposesで、一般的な教養として学ばれる英語のことを意味する。ESPとはEnglish for Specific Purposesで専門分野で使われる英語のことを意味する。

3. 研究方法

(1) 本論文の「本論」の構成

本研究は上記の目的を達成するために以下の章立てて論を進める。すなわち、仮説の証明については第1章及び第2章で論じる。

・序論

・本論

第1章 インターネット英語の一般語彙の指導のための理論的枠組み

第2章 インターネット英語の一般語彙の指導の実践と結果

結論

(2) 第2章の実践の概要

第2章では筆者が立てたシラバスのもとに実践を行うが、授業の対象、期間、内容と方法などは以下の通りである。

・授業対象：文教大学情報学部2年生

・実施期間：2004年4月中旬～6月下旬

・実施方法

①事前調査：学生の語彙に対する意識
学生の語彙力

②授業実践：上記期間の計10回の授業

授業時間内に、インターネット英語の一般語彙の認知的な理解を促す指導と言語活動としてディクテーションとスピーチを行う一定の時間を盛り込む。認知理解および言語活動の定着を把握するため簡単なテストを毎回行って記録していく。

③事後調査：学生のインターネット英語の一般語彙に対する意識がどのように変わったかを調査する。学生の語彙力はどのように進歩したかを調査する。さらに、事前調査、授業実践、事後調査を合わせて分析を行い、この実践によって学生の語彙習得に対する意識の向上と語彙力の向上の2つが上がったことを証明していきたい。

第1章 インターネット英語の一般語彙指導のための理論的枠組み

インターネット英語の語彙は一般語彙から構成されている。したがって、一般語彙の習得が高いとインターネット英語の語彙の習得も高くなることが明らかである。よって、学生に一般語彙の語彙力増強への意欲を抱かせるために、認知体系学習の理論に基づき、認知的に語彙の語形成や語源を理解させる指導のシラバスと認知的に習得した語彙をディクテーションやスピーチを通じて、学生が意欲的にコミュニケーションの中で習得した言語規則の使用を行えるような指導方法などを考案して、一般語彙の指導のための理論的なシラバスの枠組みを提案する。

1. 認知理解に基づく語彙の指導法

一般に、英語学習において、語彙は暗記して覚えると考えられている。よって、語彙力は学生の暗記した語彙の蓄積の量によって決まると考えられている。学生は単語帳を通して暗記に悪戦苦闘している割には、身につけていないことを知っている。受験を意識して語彙を覚える学生は受験問題を解くために語彙を暗記している。

確かに文法規則を学ぶ学生が語彙を暗記することは効率的であり必要でもある。しかし、岸本(2001)は英語の名詞を日本語と英語を比較対照して認知的アプローチの視点から捉えている。森住(1980)は英語の単語レベルの語根を漢字の部首(「へん」や「つくり」と比較して英語にも「漢字の部首」や「意味」から認知的に語彙を理解出来ることを指摘している。このように、学生に語彙を認知的に理解させる認知体系学習の指導法が必要である。

教師はまず学生に言語規則として下記に示された語彙に関する語形成、語源など説明し習得させる。

(1) 語形成

i. 語形成について

インターネット英語において語彙が増えるのは、これまでに存在しなかった事象や概念が新たに加わり、それを新しい英語として語彙化する必要が生じた場合である。語彙を増やすには新規に語を形成したり、既存の語に変化を加えて新語を形成する方法があることを学生に下記の語形成の種類を活用して説明する。

語形成について

英 語	日本語
複合語	
Breakfast←break(破る)+fast(断食)	石橋←石+橋
handkerchief←hand+kerchief	はまぐり←浜+栗
合成語	
madam←my+dame	かえで←かえる(蛙)+て(手)
window←wind+eye	黄金←き(黄)+かね(金)
転義	
order:列→秩序→命令	咲く:サク(裂く)→咲く
fall:(葉が)落ちる→秋	話す:ハナス(離す)→(口から外へハナス)話す

語彙指導に関しては、造語能力が豊かであるNorman系語彙の特徴を生かして、語彙の増強をはかったり、その高度な抽象性からくる意味の多様性などに目をむけさせることを示唆している。

このように認知的に語彙の語源から理解させる指導が学生に語彙を学ぶ動機を与える。英和辞典であれば下記のように語彙の語源などを載せているものがあるので、見出し語だけでなく、その語の語源にも目を配る習慣を身に付けさせ辞書を積極的に活用する意欲を学生に指導する。

英語の語彙指導の際に、日本語との対比を示し、その類似性に言及すれば、たんに生徒の動機や興味を喚起するだけでなく、ことばがどのようにしてできたのかという言語教育の立場からみても益すること大である。このことは、語彙の日本語との対比を示し、その類似性に言及することはインターネットの英語の一般語彙を認知的に理解させる効果が大きい。

(2) 派生語と複合語

Nation (2001)によると、「第一言語では小学校4年生ぐらいから急激に語彙が増加し始めるが、一つには接辞に関する知識が増えるからだと言われる。また、第二言語において接辞の知識が増えると、新しい語を学ぶ場合その語に含まれる接辞と自分の知識と関係づけて記憶を強化できる。文脈から推量した未知語の意味が正しいかを確認することができる」と述べている。即ち、学生が頻度の高い一般語彙を習得して身に付けた後は、さらに、接頭辞、接尾辞、語根の知識が一般語彙の増強にいかに関与しているか分かる。そこで、認知体系学習の中で派生語と複合語などに含まれる意味や機能を認知的に理解させる指導方法について考察する。

i. 派生語

派生は複合とともに広く行われる語形成のひとつである。派生語は独立した語彙項目や語幹に接辞を添加するか、あるいは形態上の変化を加えて語彙を形成することをいう。

Nation (1990) はギリシャ語やラテン語由来の接頭辞、接尾辞、語根の知識を使って語彙の増進を図る方法を述べている。英語力の高い学習者は新語の中に含まれる接頭辞、接尾辞をすでに知っている。

また、Nation (1990) は接頭辞、接尾辞と関連づけて学習することにより、記憶を強化することが出来ると述べている。この説として、例えば、conventionの意味は「集会」である。このconventionの接頭辞con-は「ともに」という意味を、語根であるラテン語のvenireの意味は「集まる」である。convene動詞から名詞に品詞を変化させる接尾辞-tionを添加してconvention「集会」と派生語を学生が認知的に語彙を理解するとの解釈ができる。

このように、単語の意味の成り立ちを分析的に学生に覚えさせることにより語彙を効果的に習得させることができる。さらに、読解中に未知語に遭遇した場合でも接頭辞、接尾辞、語根からその意味をある程度推測することも可能である。

Mochizuki and Aizawa (2000) は、日本人の高校生と大学生を被験者にして、Bauer and Nation (1993) の作成した図表から接辞レベルのレベル3からレベル6までの接辞の中から選んで疑似単語を作り、接頭辞の場合は日本語で接辞の意味を、接尾辞の場合は品詞を問うテストを実施して、習得しやすい接辞の順序を調べた。その結果の様子を次のように述べている。

接頭語の場合は一番よく習得されていたものはre-,un-,pre-で、2番目がnon-,ex-, 3番目がanti-, 4番目がsemi-,en-,post-, 5番目がinter-,counter-,in-で、最後がante-であった。次に接尾辞の場合は最も習得したのは-ation,-ful,-mentで、2番目が-ist,-er,-ize、3番目が-ness,-ism,-able、4番目が-less,-ityで、最後

が-sh,-yであった。接尾辞はすべてレベル3、レベル4に含まれるもので頻度の高いものである。

一方、接頭辞は半分以上がレベル5に属する規則的だが頻度の低いものであった。

英語の語彙の構成要素は接頭語 (Prefix), 語根 (Root, or Stem), 接尾語 (Suffix) の3つである。この3要素の分類は意味上の分類になる。一方、文法上の区別で語根や接尾語が取り扱われる。森住 (1980) は接頭語や接尾語を単語のレベルで日本語と英語を比較させて、語彙の要素分析あるいは派生の類似性を学生に指導して、語彙の認知的な理解に結びつけるように実際の授業などに派生語を取り上げて語彙習得に興味を抱かせる必要があることを指摘している。

ii. 複合語

インターネット英語の語彙には複合語が多く使用されている。複合は合成とも呼ばれるもので派生とともに語形成の主流をなす。独立して現れる語を二つ (以上) 並列して、より大きな語を造ることである。

複合によって造られた語が複合語であることを学生に認知的に理解させる。英語と日本語に共通する複合語について学生には複合語は英語にも日本語にもあることを学生に認知的に理解させるように指導を行う。

一般語彙の複合語で、Xという語とYという語が合成されてXYの一般語彙が造られた場合、複合語全体の品詞を決め、さらに意味の中核をなす語が含まれている。この意味の中核をなす主要語は前語のXではなく後語のYであることをXYの図解と複合語の例を取り上げて学生に説明する。さらに、この主要語が名詞である複合名詞を理解させて学生に複合語を分解させる。したがって、複合名詞の構成を認知的に理解させさせるために複合語の合成した語彙の構成を (1) 「名詞+名詞」、(2) 「形容詞+名詞」、(3) 「副詞+名詞」に区分させた。学生に語彙力を増強させるためにはインターネット英語の語彙を分解させるタスクが必要である。なぜならば、インターネット英語を分解した語彙はJACET8000に掲載されている語彙と同じものであることをタスクの中で学ばせることが学生の語彙力増強につながると思うからである。

(3) 指導シラバス

日本の英語教育は文法中心のシラバスである。当然、語彙学習の目標は高校や大学の入学試験に合格するためのシラバスが用意される。学校では語彙指導に十分な時間をさくことはしない。検定教科書に出題された語彙の発音と意味の解説で終わらせている。その言語にある語彙の語源、語形成、発音、語彙における類似性、日本語と英語の比較など、その言語に含む語彙について、認知体系学習の理論内容を学生に指導する機会がないと思われる。

シラバスの作成にはMackey (1965: 323-325) はシラバスを教授法との関連で論じており、以下に示す4つの要素が考慮されなければならないと指摘している。

- ①内容 (content) -学習目標、どのような言語技能をどの程度学習すればよいか。
- ②具体性 (specification) -学習目標と到達すべき言語技能のレベルが具体的に示されているか。
- ③妥当性 (justification) -学習目標を達成するのにふさわしい適切な学習項目が含まれているか。
- ④学習目標達成の度合い (attainability) -シラバスに明示されている学習目標を達成するのに無理がないか。

一般語彙の指導のための理論的な枠組みにするために、上記の4つの要素が考慮された。この要素を考慮し、文法中心シラバスの中に留まらず習得した語彙が言語活動につながる場面のシラバスの中

で、認知的に語彙を理解させるシラバスの構築について考察する。

i. 文法中心から言語使用とした語彙のシラバスについて

英語を学ぶことは、一般的にはその文法体系に習熟することと同一視されている。しかし、文法を中心とするシラバスの代わりに、語彙を使用する場面のシラバスが必要である。その理由として、学校で学ぶ英語の教育課程においては、英語の語彙の数量や種類の制限と文法項目の制限とは互いに関連づけて進められている。一方、日常よく使う実用的な生活や仕事の場面でのコミュニケーションの語彙も必要である。

ii. 語彙を使用する場面を中心とした語彙のシラバスの必要について

認知的に語彙を理解させる言語を使用する場面を中心とするシラバスは、文法を中心とするシラバスの枠組では収めきれない。使用場面シラバス（仮称）は英語の伝達の側面を生かすさらにより方法を見つけ出そうとするところにある。なぜならば、文法を中心とするシラバスを通して身につけた英語の語彙は伝達上不十分だからである。それはその語彙を使用する場面に適用した語彙が不足しているからである。また、教室で練習する表現形式が、本当にその言語を使いたいと思う場面で必要な表現にぴったり合っていることはあまりない。状況に応じて必要な語彙、また特定の場面で必要とされる適切な言葉の使い方というものがある。

iii. 一般語彙を認知的に理解させるシラバス

まず、語彙を認知的に理解させるシラバスが必要である。したがって、一般語彙の指導のための理論的なシラバスの枠組みを固めるために、語形成や語源などから認知的に理解させるためのメタ言語の理解を含めた指導が必要である。英語の語彙を最初から暗記して覚えるのではなく、認知的に語彙の語形成や語源を理解して語彙を覚える。

(1) 認知体系学習の全体のシラバス

一般語彙を認知的に理解させた後、その語彙を使って言語活動を行いながら語彙を学習するシラバスと一週間に一度、授業時間90分の内、インターネット英語の一般語彙の認知的理解指導を20分と一般語彙の言語使用指導に20分、専門語彙指導を含めたビジネス英語の指導に40分を当てた指導案を作成して一般語彙の指導を実践する。

「語彙における類似性」を参考に考案したシラバスは派生語の接頭辞、接尾辞と複合語や語源と語彙の類似性に関した事項で構成されている。

次に言語使用のシラバスは認知的に語彙を理解した言語を使用する場面でのスピーチ、ディクテーションなどの言語の使用練習から語彙を覚える事項で構成されている。これらの認知的体系学習法と実際に使えるようにするための言語使用の練習による学習の両輪で構成したシラバスは、学生がメタ言語や語彙に興味を抱き認知的に理解して言語使用の練習をすることより、学習意欲を高めさせることができる。

認知的理解指導と言語使用指導に貴重な時間を割いたが、語彙を習得するための認知的理解と言語使用の練習を結び付け、同じ時間内で連携させたシラバスは一般語彙力を増強させる価値が生まれる。

このシラバスの効用により学生がインターネット英語の一般語彙の語彙力の増強にもつながる。このように、認知的に理解して覚えた言語とそれを使用する練習を連携したシラバスの枠組を構成した

のである。

(2) 2004年度 春学期のビジネス英語の認知的なシラバス

春学期（月曜日）

クラス：E,S（共通）

目標：インターネット英語の文章を理解し、タスク演習から英語のディスコース・コミュニティーのスキルを学ぶ。特に専門語彙の習得に重点授業を行う。

専門語彙の目標数：100語

インターネット英語の使用テキスト：英文ビジネスEメール必携マニュアル

スケジュール

表13 言語使用の指導シラバスの計画表

回数	2004年月日	Lesson (語彙の使用場面で対話) 貿易を中心のTaskと演習	メタ言語の指導
第1回	4月12日	オリエンテーション	語彙サイズのアンケート調査 語彙の認知的理解の紹介
第2回	4月19日	総務、仕事をEメールに合わせる	Taking the first step 語形成と語源 (1)
第3回	4月26日	工場見学、メッセージを書く	Taking the First Step (2) 語形成と語源 (2)
第4回	5月10日	生産管理、メッセージを書く	Selecting the Market 接頭辞 (日英の比較)
第5回	5月17日	価格交渉、正しく書く(1)	Selecting the Distributor 接頭辞による反対語形成
第6回	5月24日	倉庫管理、正しく書く(2)	Export Financing 接尾辞
第7回	5月31日	棚卸、正しく書く(3)	Packing and Shipping 複合語の概要と分析
第8回	6月7日	外注管理、正しく書く(4)	Advertising 複合名詞の分解と新造力
第9回	6月14日	コストダウン、正しく書く(5)	Arbitration 語源と語彙の類似性
第10回	6月21日	リードタイム、ファイルを添付	Decision to Import メタ言語と英語の語根
第11回	6月28日	ファイルを添付	語彙サイズのアンケート調査

(3) 認知的体系学習法

英語学習において、学生は語彙を丸暗記や反復練習して覚えるのではなく、認知的に語彙の語形成や語源を理解して覚える認知体系学習方法を指導する。その結果、学生の語彙力は認知的に理解して覚えた語彙の蓄積の量によってコミュニケーションの中で使える語彙の数が決まってくる。したがって、下記の3つの学習法をとった。

- ①インターネット英語の語根を中心に一般語彙を分解すると接頭辞、語根、接尾辞の3つの構成要素になっている。実際の一般語彙を分解させて、接頭辞、語根、接尾辞が入る場合、接頭辞と語根の場合、語根と接尾辞の場合、語根と語根の場合の4種類になることを理解させる。例えば、inspection (検査) という語はin-接頭辞、specereラテン語の「見る」、-ionは接尾辞で、inspectの動詞を-ionの接尾辞を添加させて動詞から名詞に品詞を転換することを理解させる。
- ②学生が語根を中心に接頭辞を縦列、接尾辞を横列に各種類の接頭辞と接尾辞を掲載したマトリックスの座標に接頭辞、語根、接尾辞の組み合わせを辞書から語彙を拾い出させてマトリックスの座標(資料28を参照)に記入させる語彙指導をする。学生は接頭辞と語根が有する語彙の造語や接尾辞による品詞の転換で実践的に語彙の派生語を理解できる。

③語彙同士の合成による複合語もそれ自体別個の語、例えば、production control (生産管理)、quality control (品質管理) など、二つ (以上) 並列させてマトリックスの座標に記入させる語彙指導をすると、新しい語彙の可能性を認知するとともにインターネット英語の一般語彙を比較的簡単に覚えることができる。その理由として、インターネット英語の語彙は一般語彙から構成されていることを理解できるため、比較的簡単にインターネット英語の語彙も理解される。

2. 言語使用に基づく認知的体系学習の指導方法

認知的体系学習の指導方法のための理論的なシラバスの枠組みとして、語彙を丸暗記や反復練習による単なる習慣の積み重ねをとらえるのではなく、語彙の語形成や語源を認知的に理解させる認知的体系学習方法について論じた。

その言語を使いたいと思う場面で、必要な英語の表現にぴったり合っていない語彙を使用することは語彙力がコミュニケーション能力不足の状態に留めていると思われる。また、認知的体系学習を通じて、未知語の意味を文脈から推測するなどの言語に関する知識 (usage) に留まらず言語使用 (use) することが必要である。したがって、言語使用を行う際には、認知的に語彙の規則を理解して覚えた語彙のディクテーションを行い、さらに、スピーチなどから習得した語彙の練習から実際に使えるように語彙を覚えるように指導する。

(1) ディクテーション

英語で話す機会がないが、インターネット英語のEメール (電子メール) は直接、文字のデータの交信でコミュニケーションを図っている。しかし、Webやホームページ、CALLの授業などでは音声を取り取るように工夫することが出来る。したがって、英語を取り取る訓練にディクテーションを活用して語彙の規則を耳から認知的に覚えることが出来る。学生の言語能力を高めるためにディクテーションの練習を通じて語彙を習得するように指導する。

Listening comprehension と聴覚記憶テストとの関連についてHuebener (1965: 76-77) は、ディクテーションは学習者のListening comprehensionの程度と、正確に語を綴る能力を明らかにすることができると述べ、ディクテーションの持つ効果として、正確に聞くこと、口頭で言われたことの意味、正しい綴り、文字 (letters) の正確さの訓練になることを挙げている。

さらにインターネット英語の訓練にディクテーションの持つ言語学習における役割を利用すると、次の6項目に分析している。

- ・目的を持って聞くこと
- ・音、語、意味のまとまりを認別すること
- ・意味を理解すること
- ・文法形式を認識すること
- ・正しく語を綴ること
- ・正しい句読点を守ること

認知的体系学習のディクテーションの指導はインターネット英語を聴く行為は受容語彙力を増加させ、インターネット英語を聴き取って英語を書く行為は発表語彙力を高める指導方法である。

(2) スピーチ

インターネット英語の語彙を認知的に理解して覚えさせた後、その語彙の言語を使用する練習を行うことにより、さらに、認知的体系学習から習得した語彙を活用したスピーチはディスコース・コミュニティのスピーチが出来るまで練習を行う能動的な言語使用の学習方法である。また、認知的体系学習のスピーチの指導は学習者が認知的に理解して覚えた語彙を発話することは発表語彙力の増強につながる指導方法である。

深山 (2000) はディスコース・コミュニティの中で学習者が他の成員と支障なくコミュニケーションできるようにするため、どのような専門用語、文法構造、テキストなどの言語ツールを利用して習得するか目標を設定すると述べている。したがって、インターネット英語のスピーチはESPのディスコース・コミュニティの中の言語使用の練習にもなる。

ii. 語形成と語彙の意味を推測してスピーチする指導

インターネット英語の中で、未知語に出会ったとき、すぐにその意味を調べるのではなく、どのような意味なのか推測する力を養う。インターネット英語の読解においても語彙の推測する能力を養う。そこで文脈に合う単語を選択する練習から始める。選択する語彙は語形成の規則を参考にして、前後の文脈から考えて最も適する語彙を選ぶように指導する。

次に、認知的体系学習から語彙の規則と意味について認知的に理解して覚えさせる指導に、パソコンのEXCELの画面にある縦列に接頭辞、横列に語根、接尾辞の組み合わせるマトリックスの座標を用意させて、インターネット英語の語彙の語根を中心に語形成を造る指導する。さらに、その語彙の意味を理解させて、スピーチの練習をおこなうように指導する。もしも、学生が意味のわからない語彙があっても接頭辞や、接尾辞から意味を推測させる。語彙は文脈の中で発話するように指導する。インターネット英語の語彙を単独で暗記して覚えるよりも、英語の語彙の語根を中心に語形成をパソコンのEXCELの画面に記入し縦列、横列にマトリックスの座標の上にと語彙の意味を覚える。語彙を使用する場面の中でスピーチの練習するほうが記憶に残りやすい。

(3) 指導シラバス

i. 語彙を使用する場面中心のシラバス

文法を中心とするシラバスの代わりに、インターネット英語の語彙の規則を説明し、習得すべき語彙を理解し認識させる。その後、それらの語彙の規則を練習させる。そして、習得した語彙をコミュニケーションの中で使えるようにするために、理解と発話の機会を十分に与える。したがって、教師は学習者に暗記や反復練習を強制して文法規則を教え込むことはしないで、学習者がインターネット英語の語彙の規則を理解し認知して覚える。覚えた語彙を言語使用する場面で創造的に使用できるように教師は学習者の手助けをするシラバスを組み立てる必要がある。

その理由として、学生は認知的体系学習で覚えた言語によってその場の状況に応じてコミュニケーションの中で基本的な言語の使い方ができる。したがって、学生はスピーチの実践面の練習ができる。その結果、現実に対応する言語の表現のスピーチができるようになる。この効果が英語でEメール(電子メール)の発信の言語の表現に活かされる。

インターネット英語の一般語彙を認知的に理解して覚えた語彙を聞いて、書き取るディクテーションを行うことがEメール(電子メール)の発信の表現や語彙の運用の練習になる。さらにディクテーションで聞き取った語彙をスピーチの題材に使用することにより創造的に使用できるようになる。し

たがって、認知的体系学習で覚えた語彙を、実際に言語使用する場面を設定して、語彙の使われるコンテキストの練習することが学生の語彙力即英語力の増強につながる。

ii. 指導シラバス

A. 言語使用の授業のねらい

学生が語彙に関心を抱き、意欲的に語彙力を増強させる。そのために、異文化コミュニケーションを練習して、適切な表現を習得することは大切である。学生の語彙力の増強を意欲的に図るため、認知的体系学習の言語使用の指導シラバスが必要である。

B. 授業の方針

語彙力は語彙を丸暗記して身につけるのではなく、語彙の語源や語形成から認知的に語彙を理解する。その結果、語彙の増強や学習意欲につながる。日本文化、習慣や行事はビジネスに深く関連している。日本文化を話す場面の演習はコミュニケーションに役立つ。したがって、下記に示された指導シラバスの計画にしたがって言語使用の授業を行う。

表14 言語使用の指導シラバスの計画表

回数	2004年	読解教材の題材 (日本文化を英語で表現)	Vocabulary Building	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	Test
1回	4/12	New Year's Day& New Year's Eve (元旦・大晦日)	一般語彙(100語) のプレテスト実施		アンケート調査 (B)
2回	4/19	Four seasons, Spring: Summer Autumn, Winter	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
3回	4/26	Coming-of-Age Day (成人の日)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
4回	5/10	Wedding (結婚) Higan and Bon (彼岸と盆)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
5回	5/17	Education (教育)、 Kabuki (歌舞伎)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
6回	5/24	Typhoons (台風)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
7回	5/31	Earthquakes (地震)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙保持テスト 例文10
8回	6/7	Shichi-Go-San (七五三)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
9回	6/14	Respect-for-The-Age Day (敬老の日)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
10回	6/21	Bean-Scattering Ceremony (節分)	受容語彙数20 発表語彙数10	外人の音声テープによる ディクテーションとスピーチ	語彙力チェック テスト例文10
11回	6/28	アンケート	一般語彙のポストテスト		

C. 言語使用の指導項目

言語使用の指導項目に関しては下記の通りである。

1. メタ言語について説明
2. 語彙のディクテーション：
 - 日本の習慣と行事に関する語彙のディクテーション
 - ①複合語に関する語彙のディクテーション
 - ②派生語に関する語彙のディクテーション
 - ・接頭辞を添加した語彙のディクテーション
 - ・接尾辞を添加した語彙のディクテーション
3. テーマに関連した文化を表現するスピーチ
4. 日本の習慣と行事について英語のスピーチ
5. 日本文化について英語のスピーチ

第2章 インターネット英語の一般語彙の指導の実践と結果

第1章でインターネット英語の一般語彙の指導のための認知的体系学習の理論的枠組みとして、教師は学習者にインターネット英語の語彙の規則を指導し、習得すべき語彙を認知的に理解出来るように覚えさせる。その後、その覚えたインターネット英語を使えるように練習させる。そして最後に、習得したインターネット英語の語彙の規則をコミュニケーションの中で使えるようにするための指導方法の理論的枠組みを論じた。認知的体系学習に関する指導法と言語使用による指導法をふまえて、認知シラバスと言語シラバスを実践し、学生の語彙習得は、認知的理解と言語活動をもって行われることを考察する。

1. 対象、実施期間、実施方法

- (1) 対象：文教大学情報学部2年生2クラス54名
- (2) 実施期間：2004年4月12日から6月28日
授業内指導は、週に1コマ(90分)、11週間とする。

(3) 実践方法

事前調査：学生の語彙に対する意識と学生の語彙力

授業実践：上記期間の計10回の授業

具体的には授業指導案に従って、一週間に一度、授業時間90分の内、一般語彙の認知的理解指導と一般語彙の言語使用指導に40分。インターネット英語の中で英文ビジネスEメール必携マニュアルを活用した語彙指導40分を当てる。その他の指導事項に10分当てる。授業時間内に、語彙の認知的な理解を促す指導と言語活動としてディクテーションとスピーチを行う。認知理解および言語活動の定着を把握するため両者とも簡単なテスト・調査を毎回行って記録していく。

事後調査：学生の40分インターネット英語の一般語彙に対する意識がどのように変わったかを調査する。学生の語彙力はどのように進歩したかを調査する。さらに、事前調査、授業実践、事後調査を合わせて分析を行い、この実践によって学生の語彙習得に対する意

識の向上と語彙能力の向上の2つが上がったことを証明していきたい。

2. 実践前の学生の能力と意識調査

インターネット英語の語彙力を測るテストとして、中学で学んだ語彙数から大学で学ぶ語彙までの数に対しての意識と語彙知識として語形成をどのくらい知っているかを探る予備アンケートを実施する。

(1) 語彙テスト

語彙サイズテストをNation (2001) のA Vocabulary Levels Test BのThe 2,000 WORD LEVELとJACET 8000語彙テスト(資料31を参照)を採用した。実践前のクラスA/Bの語彙力のテスト結果は下記の通りであった。

このThe 2,000 WORD LEVELは3つの単語の意味と同じ意味する適当なものを6つの英単語の中から選ぶテストである。一方、JACET8000語彙テストはJACET8000から80語のサンプルを抽出するJACET 8000語彙テスト作成支援ファイルに収録された8レベルからそれぞれ10語ずつ均等に抽出されている。正答数に100をかけることで、語彙力を測ることができる。これらのテストの結果を分析する。

1. The 2,000 WORD LEVEL語彙サイズテストではクラスAとクラスBでは平均値と標準偏差は下記の図表に示すとおりである。

クラスAとクラスBの標準偏差はほぼ同じ値である。クラスAは8とクラスBは16であるが平均点、最高点と最低点はほぼ同じである。したがって、Nation (2001) のA Vocabulary Levels Test BのThe 2,000 WORD LEVELではクラスAとクラスBの英語の語彙力レベルにおいてはほぼ等しいと見なすことができる。

表15 クラスA/BのThe 2,000 WORD LEVELとJACET 8,000の語彙サイズテスト比較表

	クラスA		クラスB	
	The 2,000 WORD LEVEL	JACET 8,000	The 2,000 WORD LEVEL	JACET 8,000
	30点満点	80点満点	30点満点	80点満点
被験者数	28名	28名	26名	26名
標準偏差	8	12.5	16	8
平均値	6.1	6.7	6.4	7
最高点	25	36	23	33
最低点	1	10	1	5

2. JACET8000語彙テストではクラスAとクラスBでは平均値と標準偏差は下記の図表に示すとおりである。

クラスAとクラスBの標準偏差はほぼ同じ値である。平均値がクラスAの比率は12.5とクラスBの比率は8であるが最高点クラスA36点に対してクラスBは33点である。最低点クラスAは10点に対してクラスBは5点である。クラスAで4レベル以上の解答者10名でクラス36%に対してクラスBで4レベル以上の解答者9名でクラス35%である。クラスAとクラスBの語彙サイズレベルは3レベル以

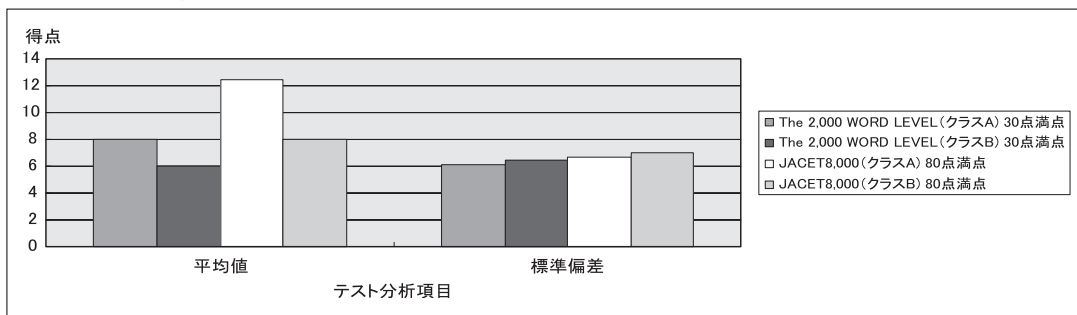
下が主流である。

下記のグラフの表はクラス A/B の語彙力をThe 2,000 WORD LEVELとJACET 8,000で測定した平均値と標準偏差を棒グラフで現したものである。このグラフからクラス A/B の語彙力はほぼ同じであることが見られる。

表16 The 2,000 WORD LEVELとJACET 8,000での平均値と標準偏差

No	テストの種類	The 2,000 WORD LEVEL(クラスA)	The 2,000 WORD LEVEL(クラスB)	JACET 8000(クラスA)	JACET 8000(クラスB)
	得点	30点満点	30点満点	80点満点	80点満点
1	平均値	8	6	12.5	8
2	標準偏差	6.1	6.4	6.7	7

A/B クラスの語彙力テストの平均値と標準偏差の比較グラフ



3. 認知シラバス実践

大学生への一般語彙指導実践に関して認知的に指導するため、使用した教材、指導実践と授業指導案の2点をまとめた。

(1) 教材 種類

a. 認知的に語彙の語形成を理解させる教材：

インターネット英語の使用テキストは英文ビジネスEメール必携マニュアルを中心に学生が語形成からインターネット英語の語彙を認知的に理解するために、森住（1980）の『英語教育と日本語』から語形成の種類を引用して考案した教材を使用する。例えば、学生が日本語の「漢字の部首」と英語の派生語との比較などから、学生がことばについて興味を抱き認知的に理解して学生の語彙力を意欲的に伸ばせるような教材。

b. 海外生産から商取引までのビジネス・コミュニケーションに使用するインターネット英語の一般語彙と専門語彙を理解させる教材：①Macmillan publish（1984）『Business International Trade』と②執筆（2002）

『仕事現場の英会話』貿易実務と輸送の知識を土台に、海外生産から商取引までのディスコース・コミュニティーを中心としたコミュニケーションを学ぶ。実践的コミュニケーションを理解させて

学生の語彙力の増強につなげる。

c. 日本文化を英語で表現させる教材：

齊藤(1995)の『日本文化を英語で表現』国際交流の観点から日本の文化や行事などの表現を学ぶ。言語を使用する場面で学生に意欲的にスピーチやディクテーションなどをさせて、ことばに興味を抱き認知的に理解させることが学生の意欲につなげられる。

(2) 指導実践と授業指導案

授業指導案の構成

授業の手順	配当時間
挨拶と諸注意	5分
一般語彙の認知的理解	20分
インターネット英語の指導	40分
・インターネット英語の講義	
・語彙指導	
・Dialogue	
・Terminology Practice	
一般語彙の言語使用	20分
整理と予告	5分

(1) 実践と成果

第1週 Introduction：一般語彙の認知的理解習得の主旨と方法のオリエンテーション

実践：

日本語は「漢字の部首」や「意味」から語彙を認知的に理解出来るように、英語の語彙を最初から暗記して覚えるのではなく、複合語、合成語、切株語、逆成、かばん語、頭字語など、認知的に語彙を指導した。その結果、学生がメタ言語について気づき、語彙に興味を喚起する兆しが出てきた。このことはインターネット英語の語彙の増強につながる。その後、予備アンケートとNation(2001)のA Vocabulary Levels Test BのThe 2,000 WORD LEVELとJACET 8,000の2つの語彙サイズテストを実施した。

成果：

このThe 2,000 WORD LEVELは3つの単語の意味と同じ意味する適当なものを6つの英単語の中から選ぶテストである。一方、JACET 8,000語彙テストはJACET 8,000から80語のサンプルを抽出するファイルを収録している。このファイルには8レベルからそれぞれ10語ずつ均等に抽出されている。正答数に100をかけることで、語彙力を測ることができる。

第2週 語形成の概要(日英の比較)(1)

実践：

言語はその語彙を使う人々の生活様式や風土がまともに反映されているなど学生に説明後、再度、複合語、合成語、転義、切株語、などについて日本語と比較しながら語形成について指導を行った。

成果：

上記の合成語、転義、切株語、などは学校では認知的体系学習の語彙指導を行われることなく、今回

初めて知った学生がほとんどであった。日本語との比較を認知的に理解して記憶することができた学生が多かった。

第3週 語形成の概要（日英の比較）（2）

実践：

前回と同様に逆成、かばん語、頭字語などのについて日本語と比較しながら語形成の指導を行った。その後、語形成の種類を理解するための小テスト（Appendix34を参照）を実施した。

成果：

何人かの学生は予備校や塾で次のような複合語があることは覚えていた。例えばblackboardは黒板の意味であるがblack（黒色）+board（板）のように、この2語がひとつに結び新しい意味の黒板としてblackboardが造られた言葉であることや、派生語、例えば接頭辞over（上に）が語根coat（コート）に添加してovercoat外套の意味を表すこと。また、接尾辞-nessをkindに添加させてkindness、形容詞から名詞に品詞を換えたなどの語形成についてである。しかし、かばん語、例えばmotocarのmoとhotelのtelが融合してmotelの語を造ることや切株語、例えばtaxiの英語はtaximeter cabからtaxiの部分を取り取るなどの語形成は、ほとんど知らないのが実態であった。一部の学生はmotel、kindness、overcoat、blackboardなどのことばは知っている。認知的体系を持つて、語彙を理解するのではなく、学生個人が単語帳を利用して暗記の作業をする努力にゆだねられることが多く、中学や高校では認知的理解する言語規則の指導からでなく単語の丸暗記を奨励して語彙サイズの量のみの指導を図っているのが実態である。

第4週 接頭辞

実践：

英語の語彙力を増やすには派生語の接頭辞、語根、接尾辞について概要を理解することを指導した。さらに漢字を習得する方法から派生語を理解させる方略として、漢字の部首を黒板に板書後、英語の派生語の接頭辞と漢字を比較させた。さらに、学生に英語の接頭辞を添加した英語を辞書で検索させ語彙調査表に記入させた。

接頭辞には色々なものがある。up-（「上」例upward, upstairs）のような短くて馴染みのものもあれば、anthropo-（「人間」例 anthropology）のような長くてあまり馴染みのないものもある。また、over-（「越えて」例 overwork, overgrow）のように1つの単語として使用できる（overなる単語が存在する）ものもあれば、bio-（「生命」例 biology, biotechnology）のように単語の一部としてしか存在しない（bioなる単語は存在しない）ものもある。更に、uni-（「1」例 unicycle, universal）のように意味がはっきりしたものがあれば、re-（「隠れる」例 refuge、「反対」例 resist、「反復」例 researchなど）のように複数の意味があるものがあることを指導した。また、現れる環境によって形が少し変わる、例えば、in-「否定」は impossible, irregularなどがあるので、注意して語彙を見るよう指導した。このほかに、per-, ex-, poly-, inter-, by-など見たことのある接頭辞があることも指導した。学習成果としては20語以上覚えた学生が60%で、10語ぐらいの者が40%である。その後、小テスト実施。

成果：

英語の接頭辞と漢字の部首を比較して指導した結果、これまでに経験のない語彙習得方略の存在に興味を抱いた学生が多かった。学生に英語の接頭辞を添加した語彙を辞書で検索させることに

より、辞書にある接頭辞を添加した語彙に関心を向けさせることが出来た。

漢字の習得方法をヒントに接頭辞と漢字を比較させ共通点を認知させるようにタスクの中で、英語の接頭辞を添加した英語を辞書で検索させると関心が高まった。接頭辞の理解度と接頭辞の82種類の習得の成果を確認するため小テスト（Appendix35を参照）を実施した。

小テスト

クラスA 28名とクラスB 26名に語形成の種類の理解度のテストを実施した。テストの所要時間は40分間である。

学生は見慣れない接頭辞に興味を示さないことと、学生に馴染みの少ない接頭辞は以下の通りである。

allo-, ambi-, ante-, counter-, di-, en-, endo-, geo-, hyper-, intro-, step-, stereo-,

第5週 接頭辞による反対語形成（日英の比較）

英語の語彙は無数にある。語彙の意味や語形の類似性などの角度から接頭辞による反対語形成（名詞）と接頭辞による動詞の反対語を含めて指導した。

実践：

接頭辞を覚えるとともに、それによる反対語の形成の習得も語彙力増強になることについて指導を行い、さらに、接頭辞付語彙と付かない語彙の意味を含めて指導した。その後、小テスト実施。（Appendix36を参照）

成果：

接頭辞による反対語形成の語彙が比較的の基本語彙のため容易に理解した。接頭辞による反対語による意味の異なることが学生に興味を与える機会になった。さらに、8種類の接頭辞による反対語の形成と2種類の接頭辞による反対語は学生には覚えやすいものである。

第6週 接尾辞

実践：

接尾語は意味的にも文法的にも語幹に制約を加える。したがって、接尾辞には品詞を決定する役割が含まれている。（-tion）行為、過程：ambition、（-ment）動作、行為の産物、場所：apartment、（-ness）～性、～な行為：awareness、（-ance）～な行為：acceptance（-ence）～な性質を持つbenevolence、（-er）（-ier）関係者、従事する人 cashier について指導した。その後、小テスト（Appendix38を参照）実施。

成果：

実践：

接尾辞を活用して品詞の転換を理解させた。（-tion）、（-ment）、（-ness）などの接尾辞は学生には覚えやすいものである。

第7週 複合語の概要（日英の比較）と分析

複合語の概要について語形成の主な過程は派生と複合である。複合とは独立して現われうる語を二つ（以上）並列して、より大きな語を造ることであることを学生に指導した。さらに、複合語を分解したXという語とYという語が合成されてXYという複合語が造られた場合、複合語全体の品詞を決め、さらに意味の中核をなす語が含まれていることを学生に理解させた。

複合語の意味の中核をなす主要語は前語のXではなく後語のYである。よって、中核をなす語を中心に（１）「名詞＋名詞」分類（２）「形容詞＋名詞」、分類（３）「副詞＋名詞」の区分について指導した。その後、小テスト実施。

成果：

学生は日英比較をした複合語の概要を理解した。複合名詞を理解した学生は「動名詞＋名詞」や「分詞＋名詞」の機能についてより詳しく理解して、複合名詞と動名詞や分詞についても見分けることが出来ようになった。

第8週 複合名詞の分類と造語力

実践：

前回の複合語の概要を復習後、「動詞の名詞形＋名詞」の複合語を解説した。例えばproduction plan。このように、動詞に接尾辞を加え、語を派生させて名詞に品詞を変えている。主要語の名詞を修飾する型の複合名詞は新しい語を造る<生産力>が強いことを理解させた。

さらに、「名詞＋動詞の名詞形」例えば、cargo operation, cost reduction, customer satisfaction, quality improvement, quality inspectionなどである。また、一般語彙としての意味から複合語による新しい意味を作り出していること、例えば、productの語彙がinspectionと合成されてproduct inspectionと新しい意味「製品検査」を表し、「製品」を「検査」するinspectionは他のinspectionの一般的な意味と違って生産の後に製品の検査を行なうものであるから、productによって限定されproduct inspectionとなる。productはinspectionの意味を規定しており、inspectionは規定するproductによって意味を制限される。したがって、productの一般語彙がinspectionと結びついて専門語彙の一つの意味単位となっている。複合語は動詞の名詞形＋名詞の形で動詞と直接目的語から成る型も指導した。その後、タスクの中でインターネット英語語彙の構成を分解させた。その後、小テスト実施。

成果：

学生は前回の複合語の概要から覚えた複合語の機能を理解しているためにインターネット英語の専門語彙の構成の分解は容易に理解することができた。学生はインターネット英語の語彙が一般語彙から構成されていることも理解した。

第9週 語源と語彙の類似性

実践：

学生に語源に関して英語の借用語を説明しながら、現代の英語は、いったいつ頃、どこから生じて、どのような歴史を経て今日に至るのかという英語の歴史と語彙の語源などを指導し、学生の語彙の学習意欲に対して動機や興味を喚起させながら、認知的に語彙を理解して覚える指導を行った。その後、小テスト（Appendix39を参照）実施

成果：

上記の語彙と比較して、Saxon系語彙よりもNorman系の語彙からの借用語について語彙の語源から理解させる指導をすることにより、学生の語彙を学ぶ意欲の兆しが出てきた。学生がNorman系の語彙の長い単語に関心を抱いている様子が感じられる。さらに、学生は英和中（大）辞典から見出し語だけでなく、その語の語源にも目を配るほどの意欲が出ている。

第10週 メタ言語と英語の語根

実践：

第4週目に指導した英語の語根と漢字の部首を比較したものを復習させて今回は英語の語根を中心に共通点を捕らえる。派生語の接頭辞、語根、接尾辞を見分ける指導を行った。再度、接頭辞と漢字の部首を比較して説明した。学生に辞書にある接頭辞や接尾辞などを添加された語彙と英語の語根のつながりを理解させる。そして、日英対比などメタ言語に関心を向けさせる指導を行った。その後、小テスト（Appendix40を参照）実施。（資料を参照）

成果：

英語の語根を中心に派生語の接頭辞、語根、接尾辞の存在に興味を抱いた学生が多かった。タスクで良い点数を得るために、接頭辞を添加した多くの語彙を辞書で検索するようになってきた。これは学生のメタ言語を理解する意欲の表れと思われる。

(2) 分析と考察

i. 認知シラバス実践小テストの最高点と最低点の記録

A/Bクラスの語彙力テストの最高点と最低点の記録を実施3週目から10週目の認知的理解のレベルの幅を調査した結果、A/Bクラスの語彙力テストの最高点と最低点の差異に大幅な違いが生じたのは、学生が語彙を認知的に均等に理解したことを表している。

表19 認知シラバス実践小テストの最高点と最低点の記録

		3週目	4週目	5週目	6週目	7週目	8週目	9週目	10週目
満点		33	82	60	73	90	50	73	54
クラスA	最高	28	60	40	63	33	70	60	34
	最低	11	10	11	11	13	11	11	15
クラスB	最高	29	60	36	60	34	60	60	34
	最低	11	11	9	19	13	11	11	15

ii. 認知シラバス実践

語形成、接頭辞、接頭辞による反対語形成などを認知的に理解した一般語彙のテストを実施した結果は表20に示された通りである。

表20 A/Bクラスの語彙力テストの平均と標準偏差

テストの種類	語形成の種類 (クラスA)	語形成の種類 (クラスB)	接頭辞の種類 (クラスA)	接頭辞の種類 (クラスB)	接頭辞による反対語形成 (クラスA)	接頭辞による反対語形成 (クラスB)
得点	33点満点	33点満点	82点満点	82点満点	60点満点	60点満点
平均値	18	13.5	18	21	18	21
標準偏差	4.2	5.8	4.1	3.8	6.3	7.4

テストの種類	接尾辞 (クラスA)	接尾辞 (クラスB)	複合語の概要 (クラスA)	複合語の概要 (クラスB)	複合名詞分解 (クラスA)	複合名詞の分解 (クラスB)
得点	73点満点	73点満点	90点満点	90点満点	50点満点	50点満点
平均値	18	21	18	21	18	21
標準偏差	6.3	7.4	6.3	7.4	6.3	7.4

テストの種類	語源と類似性 (クラスA)	語源と類似性 (クラスB)	メタ言語 (クラスA)	メタ言語 (クラスB)
得点	73点満点	73点満点	54点満点	54点満点
平均値	18	21	18	21
標準偏差	6.3	7.4	6.3	7.4

クラスAとクラスBの平均値と標準偏差は、上記の表20に示された通り。ほぼ同じく語彙力で語形成、接頭辞、接頭辞による反対語形成、複合語、複合名詞の分解、語源、メタ言語と英語の語根などを認知的に理解した。平均値と標準偏差に大幅な差異が生じないのは教材・指導面で同じ内容で学生に消化されたからである。したがって、学生が語彙を認知的に均等に理解したことを表している。

4. 言語使用シラバス実践

(1) 言語使用シラバス実践にディクテーションを採用

インターネット英語のEメールは英文のメッセージの発信で直接、相手と英語で話す機会がないが、お互いに会話するように英文のメッセージの発信により言語使用が可能である。

一方、WebやホームページやCALLの授業の教材から英語を聞き取る訓練にディクテーションを活用して語彙の規則を耳から認知的に覚えさせることにより言語使用が可能である。

したがって、インターネット英語を認知的体系学習にディクテーションを採用してインターネット英語を聴くように指導することは学習者の受容語彙力を増加させ、インターネット英語を聴き取って英語を書く発表語彙力を高めるひとつである。

(2) 分析と考察

インターネット英語の中にある語彙を学習者に対して認知的に理解し覚えさせた。その後、言語使用練習、第1回目から10回目までのディクテーションをクラスAとクラスBに行った。このクラスAとクラスBのディクテーションの平均値と標準偏差の相関係数を測定したデータをクラスAとクラスBに区別して、ディクテーションの小テストの結果について考察する。

i. ディクテーションによるクラスAの得点

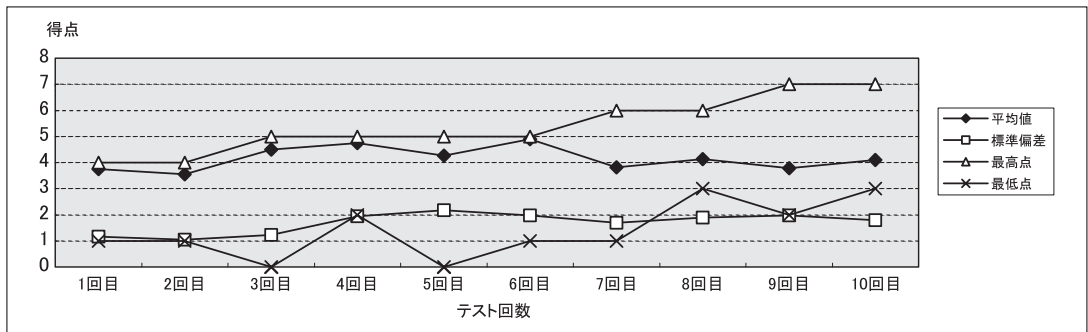
クラスAの学生のディクテーションの解答した最高点、最低点、平均点と標準偏差のデータを表21で示した。

表21 ディクテーションによるクラスAの得点の変化

	10点満点	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目
1	平均値	3.75	3.55	4.5	4.75	4.26	4.89	3.82	4.13	3.79	4.10
2	標準偏差	1.16	1.05	1.23	1.94	2.18	1.97	1.69	1.9	1.98	1.79
3	最高点	4	4	5	5	5	5	6	6	7	7
4	最低点	1	1	0	2	0	1	1	3	2	3

クラスAの学生は4月の開始1回目より10回目の平均値では0.35の伸びを示した。得点の最高点では1回目より10回目では3点伸びた。最低点では2点上がった。3回目の得点から徐々に伸びていることが下記のグラフに示されている。

一般語彙のディクテーションの推移（クラスA）



ii. ディクテーションによるクラスBの得点

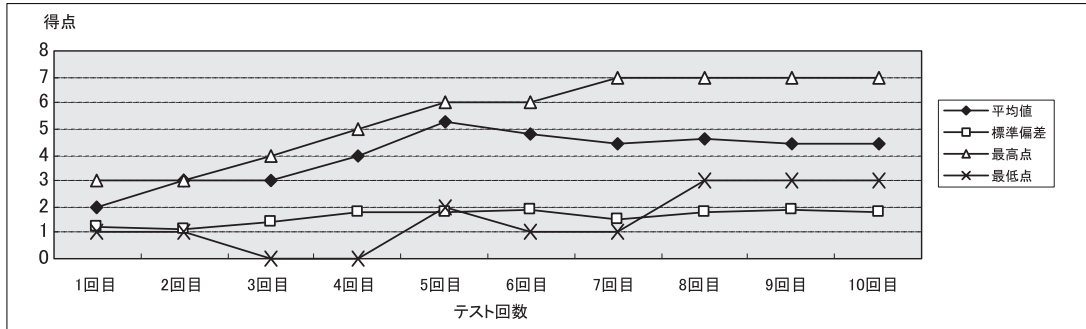
クラスBの学生のディクテーションの解答した最高点、最低点、平均点と標準偏差のデータを表22で示した。

表22 ディクテーションによるクラスB一般語彙の得点の変化

	10点満点	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目
1	平均値	2	3	3	4	5.25	4.84	4.46	4.61	4.42	4.46
2	標準偏差	1.19	1.14	1.41	1.82	1.8	1.91	1.47	1.81	1.92	1.79
3	最高点	3	3	4	5	6	6	7	7	7	7
4	最低点	1	1	0	0	2	1	1	3	3	3

クラスBの学生は1回目より10回目の得点の差は平均値では2.46の伸びを示した。4回目の得点から徐々に伸びていることが下記のグラフに示されている。得点の最高点では1回目より10回目では4点伸びた。最低点では2点上がった。3回目の得点から徐々に伸びていることが下記のグラフに示されている。

一般語彙のディクテーションの推移（クラスB）



クラスBの最低の得点にいた複数の学生は1回目より3回目から積極的に語彙の習得に意欲を現した。その結果、最低の得点は1から3に伸びた。高得点の学生も増加した。この最高と最低得点の増加の原因は認知的に語彙を理解して、その語彙を使用練習するのに慣れてきたことが挙げられる。

言語使用による学習効果を平均値と標準偏差の観点から、クラスAとクラスBの学生のデータを分析したのが表23である。

表23 平均値と標準偏差の比較表

テストの回数	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	9回目	10回目
平均値(クラスA)	3.75	3.55	4.5	4.75	4.75	4.26	3.82	4.13	3.79	4.1
平均値(クラスB)	2	3	3	4	5.25	4.84	4.46	4.61	4.42	4.46
標準偏差(クラスA)	1.16	1.05	1.23	1.94	2.18	1.97	1.69	1.9	1.98	1.79
標準偏差(クラスB)	1.19	1.14	1.41	1.82	1.8	1.91	1.47	1.81	1.92	1.79

特に、上記の平均値と標準偏差のデータの動きを表23に示した。この結果、標準偏差はクラスAとクラスBの学生はほぼ同じ値であるが、平均値の視点から見ると、クラスBの学生は10回目でクラスAより0.36ポイント高い。このことは最高と最低の得点が良くてもクラス全体の得点にバラツキが出ていることを示している。

5. 実践後の学生の語彙サイズと意識調査

インターネット英語を認知体系学習の理論に基づき、認知的に語彙の語形成や語源を理解させる指導の実践後、学生の語彙サイズと意識調査の結果は下記の通りである。

(1) 実践前と実践後の語彙サイズの変化

i. Nation (2001) のA Vocabulary Levels Test BのThe 2,000 WORD LEVELでの測定

The 2,000 WORD LEVEL語彙サイズテストでのクラスAとクラスBの平均値と標準偏差は下記の図表に示すとおりである。

実践前のクラスAとクラスBの標準偏差はほぼ同じ値である。実践後の標準偏差がクラスAは6.1か

ら9.1、クラスBは6.4から10と伸びている。クラスAとBの最高点と最低点の差は大きくない。中間の点数の習得者の数が増えている。クラスAとクラスBの英語の語彙力レベルを、Nation (2001) のA Vocabulary Levels Test BのThe 2,000 WORD LEVELを使って測定した結果、実践前より実践後では標準偏差、平均値とも伸びている。

表24 The 2,000 WORD LEVEL語彙サイズテスト
(30点満点)

	クラスA			クラスB			実践後 A/Bの伸びの比較
	実践前	実践後	差 異	実践前	実践後	差 異	
被験者数	28名	28名		26名	26名		
平均 値	8	13	5	16	16.3	0.3	3.3
標準偏差	6.1	9.1	3	6.4	10	3.6	0.9
最 高 点	25	27	2	23	29	6	2
最 低 点	1	0		1	0		

ii. JACET8000での測定

JACET8000での語彙サイズテストではクラスAとクラスBでは平均値と標準偏差は下記の図表に示すとおりである。

実践前のクラスAとクラスBの標準偏差はほぼ同じ値である。実践後の標準偏差がクラスAは6.1から10.4、クラスBは6.4から10.6と伸びている。クラスAとBの最高点と最低点の差は大きくない。クラスAとクラスBの英語の語彙力レベルをJACET8000を使用して測定した結果、実践前より実践後では標準偏差、平均値の両方が伸びている。

表25 JACET8,000
(80点満点)

	クラスA			クラスB			実践後 A/Bの伸びの比較
	実践前	実践後	差 異	実践前	実践後	差 異	
被験者数	28名	28名		26名	26名		
平均 値	16.2	18.3	2.1	16	17.8	1.8	3.3
標準偏差	6.1	10.4	4.33	6.4	10.6	4.2	0.9
最 高 点	25	53	28	23	50	27	2
最 低 点	1	0		1	0		

ii. 2,000WORD LEVELとJACET8,000での平均値と標準偏差

実践前と実践後の語彙サイズの変化を2,000WORD LEVELとJACET8000での平均値と標準偏差データから見ると表25に示した通りである。

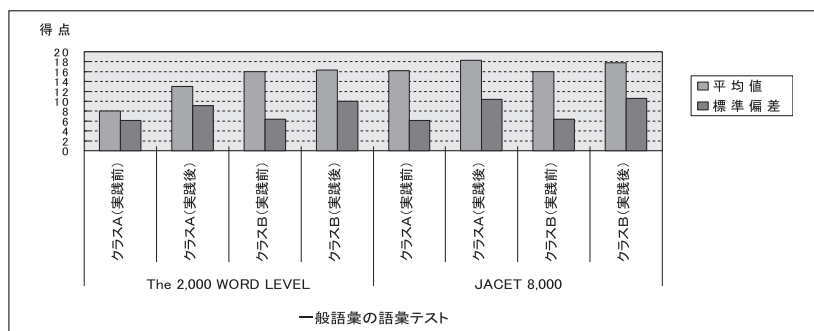
表25 2,000WORD LEVELとJACET8000での平均値と標準偏差

	The2,000WORD LEVE				JACET8,000			
	クラスA (実践前)	クラスA (実践後)	クラスB (実践前)	クラスB (実践後)	クラスA (実践前)	クラスA (実践後)	クラスB (実践前)	クラスB (実践後)
得点(満点)	30	30	30	30	80	80	80	80
平均値	8	13	16	16.3	16.2	18.3	16	17.8
標準偏差	6.1	9.1	6.4	10	6.1	10.4	6.4	10.6

クラスA/Bの語彙力は、実践前の語彙サイズテストと実践後の語彙サイズをThe 2,000 WORD LEVEとJACET 8000のテスト問題で測定した結果、The 2,000 WORD LEVEの平均値と標準偏差を比較するとクラスAは平均値が5点増加、標準偏差では3伸びている。一方、クラスBは平均値が0.3点増加、標準偏差では3.6伸びている。

JACET 8000ではクラスAは平均値が2.1点増加、標準偏差では4.3伸びている。一方、クラスBは平均値が1.8点増加、標準偏差では4.2伸びている。また、クラスA/Bの語彙力はThe 2,000 WORD LEVELとJACET 8,000での平均値と標準偏差で棒グラフに示した通りである。

表26 The 2,000 WORD LEVELとJACET 8000での平均値と標準偏差



実践後、学生の意識の変化について1) 学生の認知的理解に対する学習意欲の変化、2) 学生の言語使用の学習意欲についてアンケートを行った(Appendix42を参照)。アンケートの分析結果を資料29に示した。さらに、語彙を中心にディクテーション、スピーチ、コミュニケーションとの相関関係をSPSSによる分析結果のデータを表27に表示した。

表27 語彙、ディクテーション、スピーチへの意識

言語使用の好感度	好き		どちらかといえば好き		どちらかといえば嫌い		嫌い	
	4月	6月	4月	6月	4月	6月	4月	6月
語彙	6%	12%	12%	38%	34%	32%	48%	18%
ディクテーション	2%	10%	10%	40%	45%	38%	43%	12%
スピーチ	6%	14%	18%	40%	27%	42%	49%	4%
コミュニケーション	10%	10%	15%	16%	21%	50%	54%	22%

(2) インターネット英語の語彙に対する学生の意識

(i) 語彙に対する学生の意識

語彙を認知的に理解して学習する行為に対する好感度はデータに示されたように6月は伸びている。学生の感想は以下の通りである。

- ・語彙を丸暗記して覚えるよりも認知的に語彙を理解して覚える方が授業に参加している気持ちになった。
- ・丸暗記して覚えるよりも語彙の記憶が長く続くのががんばろうと思う。
- ・忘れてもすぐに語彙を思い出すので一生懸命前向きに覚える意欲が出てきた。
- ・認知的に語彙を理解して覚える方が語彙の意味が解り、語彙の記憶がし易い。
- ・丸暗記しないで語彙をがんばって覚えた。語彙の定着率が高くなることに気がついた。

(ii) ディクテーションに対する学生の意識

ディクテーションは音声で書き取る練習で聞く力、書く力、語彙力、文法能力などを総合的に伸ばし、さらに、言語使用の正確さを高める効果があると考えられている。50人の学生のアンケートから言語使用の学習方法の反応は1) 語彙とディクテーションは好きですかの質問に対して語彙の場合、好き(6人12%),どちらとといえば好き(19人38%),どちらとといえば嫌い(16人32%),嫌い(9人18%),次に、ディクテーションは好き(5人10%),どちらとといえば好き(20人40%),どちらとといえば嫌い(19人38%),嫌い(6人12%)であった。

学生の語彙とディクテーションの意識に関する相関関係はSPSSで分析すると、語彙に対する意識はディクテーションの意識のピアソンの相関関係は高く、その値は有意であった($n=4, r=.976, p<.024$)ディクテーションに対しての学生の感想は以下の通りである。

- ・ディクテーションで英語を覚える意欲が出てきた。
- ・自分が認知的に語彙を理解して覚えられる。
- ・ディクテーションをされると語彙の記憶がし易くなり、もっと語彙を増やしたい。
- ・ディクテーションで英語の単語や短い英文を書けるようになったのでやる気が出てきた。
- ・ディクテーションで英語の単語の意味を正しく理解して聞こえるようになって楽しくなった。

(iii) スピーチに対する学生の意識

スピーチの練習にはディクテーションから出題した語彙の全文を使い、何度も実践した。その結果、50人の学生のアンケートから言語使用の学習方法の反応は1) スピーチは好きですかの質問に対して好き(7人14%),どちらとといえば好き(20人40%),どちらとといえば嫌い(21人42%),嫌い(2人4%),であった。学生の語彙とスピーチとの意識に関する相関関係はSPSSで分析すると、語彙に対するスピーチの意識のピアソンの相関関係は高く、その値は($n=4, r=.882, p<.118$)有意であった。

(iv) コミュニケーションに対する学生の意識

一方、コミュニケーションに対しての学生の語彙の意識についての相関関係を分析すると、語彙に対する意識はコミュニケーション意識のピアソンの相関関係($n=4, r=.477, p<.523$)と低い値であった。自分の語彙力はコミュニケーションを運用するだけの実力レベルでないという学生の意識が表れていると思われる。

学生の感想は以下の通りである。

- ・語彙を丸暗記して覚えるよりも認知的に語彙を理解して覚えてからスピーキングとディクテーションで英語の単語や短い英文を正しく書けるようになった。

- ・語彙を丸暗記して覚えるよりも認知的に語彙を理解して覚える方がスピーキングで楽しく英語を正しく理解して聞こえるようになった。
- ・認知的に語彙を理解して覚える方が英語でスピーキングが出来るようになった。

なお、詳しい学生の感想文は資料43を参照。

結 論

1. 本研究のまとめ

本研究の目的はインターネット英語の語彙力増強への学生の意欲は、丸暗記や単純な反復練習の積み重ねとしてとえるのではなく、言語規則を認知的に理解して、その言語活動をする認知体系学習から促進されるという仮説を証明することであった。仮説は第1、2章で取り上げた。

以下の2点で全体のまとめとする。

- 1) インターネット英語の一般語彙の指導のための理論的枠組み
- 2) インターネット英語の一般語彙の指導の実践と結果

(1) インターネット英語の一般語彙指導のための理論的枠組み

本研究は学生にインターネット英語の一般語彙の語彙力増強への意欲を抱かせるために、認知体系学習の理論に基づき、一般語彙の指導のための理論的枠組みとして、

- i. 認知的に接頭辞や接尾辞などの派生語や複合語などの語彙の語形成や語源を理解させる指導シラバスと
- ii. 認知的に習得した語彙をディクテーションやスピーチを通じて、学生が意欲的にコミュニケーションの中で習得した言語規則の使用を行えるような指導シラバス。
前例のシラバスのプロセスによる認知体系学習から促進されることを論じた。

(2) インターネット英語の一般語彙指導の実践と結果の考察

第2章においては、1章でのインターネット英語の一般語彙についての指導のための理論的枠組みによる認知的体系学習の指導法をふまえて、実際に指導案を作成して実践した語彙指導の内容を述べた。その結果を 1) 全体のシラバス 2) 認知的に理解させる学習法 3) 言語使用の指導方法 4) 学生の学習意欲の変化の4点から考察した。

i. 全体のシラバス

文教大学情報学部2年生2クラスを対象に、一般語彙の語形成を認知的に理解させた後、その語彙を使った言語活動を行いながら学習するシラバスを作成した。そして、一週間に一度、授業時間90分の内、一般語彙の認知的理解指導に20分と一般語彙の言語使用指導に20分、英文ビジネスEメール必携マニュアルを活用して専門語彙指導を含めた指導に40分を当てた授業の指導案を作成し、一般語彙の指導を行った。

このように認知的アプローチの導入と言語使用の練習を両輪として構成したシラバスは、学生にメタ言語や語彙の背景、周辺への興味を抱かせ、学習意欲を高めた。

ii. 認知的に理解させる学習法

認知的アプローチによる一般語彙の語形成や語源を理解してから語彙を覚える指導を行うことに

より、学生の語彙力は強化される。このことをふまえ、森住（1980）の「語彙における類似性」を参考にして考案した学習法を実践した。その結果、接頭辞と接尾辞によって派生語が造られることを認知的に理解してインターネット英語の語彙を覚えた。その後、接頭辞と語根から成る単語の構造や接尾辞による品詞の転換を、学生は理解できるようになった。次に、複合語に関して、production control（生産管理）やquality control（品質管理）などのように独立した二つ（以上）の語を合成すると新しい語が造られることを認知的体系付けて理解することが出来た。

上記の認知的体系学習により、インターネット英語の語彙が比較的簡単に覚えられるようになった。そのわけは、インターネット英語の語彙は一般語彙から構成されていることが理解したからである。

iii. 言語使用の指導方法

学生が認知的にインターネット英語の一般語彙の語形成や語源を理解した後、ディクテーションを行い、さらに、スピーチなどの言語練習で習得したインターネット英語の語彙の規則をコミュニケーションの中で使えるようにする認知的体系学習の効果が表21、表22、表23のデータから見られる。学生の語彙サイズは実践前より実践後は表24と表25、表26に示されたデータから見られ期待通り伸びた。

iv. 学生の学習意欲の変化

学習指導の実践後に行なったアンケートから学生の意識変化をはかることができ、そこから以下のことが考察される。

- ① 学生の学習意欲は表27に示されたデータから4月時点での学生のディクテーションに対する好感度は2%またスピーチは6%であったが、慣れてくるに従い、6月下旬のデータからディクテーションは12%とスピーチは14%と好感度は増した。
- ② 語彙、ディクテーション、スピーチそれぞれに対する学生の意識は次の通りである。
 - ・ 語彙を丸暗記して覚えるよりも認知的に語彙を理解して覚える方が授業に参加している気持ちになった。
 - ・ ディクテーションで英語を覚える意欲が出てきた。
 - ・ 認知的に語彙を理解して覚える方が英語でスピーキングが出来るようになった。

以上、上記の①と②に示すように、認知的に語彙を理解して覚えさせ、ディクテーション、スピーチなどの言語活動を通じての指導は、学生の学習意欲を高める源になったことが明らかである。

従って、仮説のインターネット英語の語彙力増強への意欲は認知的な理解と言語使用から促進されることが証明された。

また、学生の意識変化によって、一般語彙の習得が高いとインターネット英語の語彙の習得も高くなるについても、上記の一般語彙の指導の実践と結果から十分に証明される。

2. 本研究の応用

日本でのESP教育のインターネット英語の語彙指導に焦点をあてる。企業が求めている英語力はTOEICの高いレベルではなく、インターネット英語を活用して会社の利益を生む実力である。会社の英語はすべてESPとしてのインターネット英語である。したがって、商経系・理工系の大学の専門分野における英語教育に本研究が応用可能である。

3. 今後の課題

今回の実践を振り替えて、以下の項目が、今後取り組むべき課題である。

英語の言語など取り巻く、インターネットによる文化や社会背景的要素について比較

文化の視点からインターネット英語の語彙を取扱って、大学生の語彙力増強への意欲を高める研究の継続。

参 考 文 献

- 相澤一美 (2003) 「どのようにして語彙を身につけるのか：受容語彙の定着から発表語彙へ」『英語教育』vol.52.大修館書店,
- 荒木一雄 (1999) 『英語学用語辞典』三省堂
- 荒木源博 (1989) 『英語語彙の文化誌』研究社出版
- 大場智彦 (2002) 「学習者中心の語彙指導に求められる観点と方策」『日本実用英語学会論叢 (第10号)』日本実用英語学会
- 岡 秀夫 (1990) 「第4章 教授・学習にかかわる領域」『英語教育研究ハンドブック』大修書店
- 川越栄子 (2002) 「医学部・看護学部におけるESP教育の実践例と今後の展望」『大学等の専門英語教育の実態調査を背景とした実践的ESP指導法の開発』資料編、平成13年度科学研究費補助金 (基盤研究 (c) 研究中間報告書 (課題番号136803269))
- 門田修平ほか (2003) 『英語のメンタルレキシコン』(株)松柏社
- 影山太郎、由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 基本語彙改定委員会 (2003) 「JACET8000」『大学英語教育学会基本語リストJACET List of 8000 Basic Words』大学英語教育学会
- 岸本映子 (2002) 「認知アプローチによる英語の名詞の「数」に関する指導」『言語文化教育学の可能性を求めて』三省堂
- 小屋多恵子 (2002) 「日本人学習者の英語コロケーション能力に与える日本語の影響」『日本実用英語学会論叢 (第10号)』日本実用英語学会
- 斉藤次郎 (1969) 『英語の語い』岩崎書店
- 斉藤 宏 (1995) 『日本文化を英語で表現』成美堂
- ジョナサン・ウェラン (2002) 『英文ビジネスEメール必携マニュアル』南雲堂フェニックス
- 深山晶子ほか (2000) 『ESPの理論と実践』三修社
- 高梨庸雄、卯城祐司 (2000) 「語彙指導」『英語リーディング事典』研究社出版
- 高橋信弘 (2002) 「英文契約書におけるhere-/there-の語彙－実態調査から－」『日本実用英語学会論叢 (第10号)』日本実用英語学会
- _____ (2002) 『仕事現場の英会話－製造業編』DHC
- _____ (1997) ENGLISH IN THE FACTORY 佐野学園 神田外語キャリアカレッジ
- 玉村文郎 (1988) 「複合語の意味」『日本語学』vol.7. 明治書院
- 投野由紀夫 (1997) 『英語語彙習得論』河源社
- 寺内 一 (2002) 「社会科学系のESP：法律専攻の学生へのアプローチ」『大学等の専門英語教育の実態調査を背景とした実践的ESP指導法の開発』資料編、平成13年度科学研究費補助金 (基盤研究 (c) 研究中間報告書 (課題番号136803269))

- 馬場景子,滝川桂子 (2002)「工業英語をモデルとしたESP教育のルール作りについての一考察」『大学等の専門英語教育の実態調査を背景とした実践的ESP指導法の開発』資料編、平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(c)研究中間報告書(課題番号136803269))
- 藤田保幸 (1996)「引用研究とメタ言語の概念」『日本語学』明治書院,vol.15.
- 村野井仁、千葉元信、畑中 孝 (2001)『実践的英語科教育法』成美堂
- 村田 年 (2002)「新指導要領の語彙制限がもたらすもの」『英語教育』vol150 大修館書店
- 森住 衛 (1980)「語彙における類似性」『英語教育と日本語』中教出版
- _____ (1991)「新大学設置基準とこれからの大学英語教育」若林俊輔教授還暦記念論文編集編『英語授業学の視点：若林俊輔教授還暦記念論文集』三省堂
- 山崎淳子 (2002)「シミュレーションとしてのESP」『大学等の専門英語教育の実態調査を背景とした実践的ESP指導法の開発』資料編、平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(c)研究中間報告書(課題番号136803269))
- Bauer,L.and I.S.P.Nation.1993.Word families.International Journal of Lexicography 6:253-279
- Krashen,S (1984).The input hypothesis: Issues and implications, New York: Longman
- L.A.Hill and R.D.S.Fieldn.1971.Vocabulary.Oxford University Press
- Laurie ,Bauer.1984.English Word Formation. Cambridge University Press
- John,Read.2000. Assessing Vocabulary . Cambridge University Press
- Michael,Mccarthy.2000. Discourse Analysis for Language Teachers. Cambridge
- Mochizuki,M and K.Aizawa(2000).A validity study of the vocabulary size test of controlled productive ability. Reitaku University Journal73:85-102
- Morizumi,M.1994.'On Correlation between LGP and LSP in Japan.'In Khoo,R.ed. The practice of LSP: Perspective Programmes and Projects. SEMEO Regional Language Center.143-156
- Nation,I.S.P.(1990). Teaching and learning Vocabulary. New York : Newbery House.
- (2001). Learning Vocabulary in Another Language. Cambridge University Press
- Rivers,W.G(1979)A practical guide to the teaching of English as a second or foreign language.Oxford:OUP
- Shinichiro, Kodani.2000. English Words. Ryukoku University
- Terauchi Hajime.2001.English for Academic Legal Purposes in Japan. Liber Press
- Tom,Hutchinson and Alan ,Waters.1987.English for specific Purposes. Cambridge
- William A.Mundell(1984).Business International Trade,Macmillan Publishing Company. New York
- Yasushi,Mitarai and Kazumi, Aizawa.1999. The Effects of Different Type of Glosses in Vocabulary Learning and Reading Comprehension. Annual Review of English Language Education in Japan, vol.10

参考資料 資料29

学生の意識をはかるアンケートのまとめ

実践後のアンケートの結果から、英語と一般語彙、ディクテーション、スピーチ、一般語彙を認知的理解する意識の変化

i. 学生の認知的理解の学習意欲の変化

- ①. 単語の学習で複合語（例えばblackboardは黒板の意味であるがblack（黒色）+board（板）この2語がひとつに結び新しい意味の黒板としてblackboardが造られたことば）を理解しましたか。
- | | |
|------------|---------|
| a. 理解した | (65 %) |
| b. 少し理解した | (40 %) |
| c. まだわからない | (5 %) |
| d. わからない | (0 %) |
| e. 全然わからない | (0 %) |
- ②. 単語の学習で派生語（例えば接頭辞over（上に）が語根coat（コート）に添加してovercoat外套の意味を表す。また、接尾辞-nessをkindに添加させてkindness形容詞から名詞に品詞を換える）を理解しましたか。
- | | |
|------------|---------|
| a. 理解した | (35 %) |
| b. 少し理解した | (50 %) |
| c. まだわからない | (15 %) |
| d. わからない | (0 %) |
| e. 全然わからない | (0 %) |
- ③. 単語の学習でかばん語（例えばmotocarのmoにhotelのtelとくついでmotelのことば造る）を理解しましたか。
- | | |
|------------|---------|
| a. 理解した | (29 %) |
| b. 少し理解した | (51 %) |
| c. まだわからない | (15 %) |
| d. わからない | (5 %) |
| e. 全然わからない | (0 %) |
- ④. 単語の学習で切株語（例えばtaxiの英語はtaximeter cabからtaxiの部分を取り取る）を理解しましたか。
- | | |
|------------|---------|
| a. 理解した | (19 %) |
| b. 少し理解した | (67 %) |
| c. まだわからない | (10 %) |
| d. わからない | (4 %) |
| e. 全然わからない | (0 %) |

Appendix 31

実践前の語彙力テスト 左側の英語を日本語に直しなさい

番号	語彙レベル	英 語	日 本 語
1	Lev.1	war	
2	Lev.1	action	
3	Lev.1	over	
4	Lev.1	operation	
5	Lev.1	m	
6	Lev.1	we	
7	Lev.1	memo	
8	Lev.1	si	
9	Lev.1	back	
10	Lev.1	atways	
11	Lev.2	bath	
12	Lev.2	religious	
13	Lev.2	bath	
14	Lev.2	olclock	
15	Lev.2	weapon	
16	Lev.2	agriculture	
17	Lev.2	essential	
18	Lev.2	despite	
19	Lev.2	site	
20	Lev.2	enable	
21	Lev.3	rminist	
22	Lev.3	colon	
23	Lev.3	insult	
24	Lev.3	fantasy ’	
25	Lev.3	transfer	
26	Lev.3	def nitel	
27	Lev.3	rail	
28	Lev.3	raver	
29	Lev.3	index	
30	Lev.3	superior	
31	Lev.3	nefrvcamer	
32	Lev.4	definition	
33	Lev.4	reduction	
34	Lev.4	dis ustin	
35	Lev.4	li htnin	
36	Lev.4	nickname	
37	Lev.4	cornaration	
38	Lev.4	curse	
39	Lev.4	firozen	
40	Lev.4	affection	
41	Lev.5	blank	
42	Lev.5	hazard	
43	Lev.5	i etra	
44	Lev.5	regulate	
45	Lev.5	spectacular	
46	Lev.5	taxation	
47	Lev.5	contemplate	
48	Lev.5	severel	
49	Lev.5	reported!	
50	Lev.5	membrane	
51	Lev.6	trifler	
52	Lev.6	chemist	
53	Lev.fi	bass	
54	Lev.6	noun	
55	Lev.6	offensive	
56	Lev.6	atternated	

Appendix 34

語彙小テスト

次の空所にことばを記入しなさい。

英語	日本語
1. 複合語	
〈 〉 ←break (破る) + fast (断食)	石橋← () + 橋
handkerchief←hand + 〈 〉	() ←浜 + 栗
() ←black+ board	〈 〉←と 〈戸〉 + つ (継) ぐ
() ←butter+ fly	
2. 合成語	
() ←my + dame	() ←かえる 〈蛙〉 + て (手)
() ←wind + eye	〈 〉 ←き 〈黄〉 + かね (金)
() ←by + cause	() ←はだか 〈裸〉 + あし 〈足〉
() ←of the clock	() ←とり 〈鳥〉 + さか (冠)
3. 転義	
() : 列 → 秩序 → 命令	咲く : サク (裂く) → 咲く
〈 〉 : (葉が) 落ちる → 秋	話す : ハナス (離す) → (口から外へハナス) 話す
() : 板 → 食卓 → 委員会	易しい : ヤサシイ (優しい) → 易しい
() : 空間 → 余地 → 部屋	鼻 : ハナ (端) → (突き出た部分) 鼻
4. 切株語	
() ←omnibus	ひじ鉄 ← ひじ鉄砲
() ←pianoforte	ムシヨ ← 刑務所
() ←airplane	スト ← ストライキ
() ←photograph	テキ ← ビフテキ
5. 逆成	
() ←editor	ひよる ← 日和見 (する)
() ←beggar	さぼる ← サボタージュ (する)
() ←housekeeping	しける ← 時化 (になる)
() ←donation	
6. かばん語	
() ←smoke + fog	ゴジラ ← ゴジラ + クジラ
() ←motorcar + hotel	ジャガイモ ← ジャガタライモ
() ←clap + crash	納豆 ← 納所大豆

Appendix 35

語彙テスト（接頭辞付き）

番号	接頭辞の意味	英 語	日 本 語
1	a-		
2	ab-		
3	ad-		
4	aero-		
5	allo-		
6	ambi-		
7	ante-		
8	audio-		
9	aqui-		
10	auto-		
11	be-		
12	bio-		
13	bu-		
14	bene-		
15	com-		
16	counter-		
17	cvcl-		
18	de-		
19	des-		
20	di-		
21	ex-		
22	en-		
23	ern-		
24	endo-		
25	aur-		
26	extra-		
27	ef-		
28	for-		
29	fore-		
30	eo-		
31	herni-		
32	holo-		
33	horne-		
34	hvner-		
35	in-		
36	ir		

Appendix 36

第8回 語彙テスト

氏名：

問. 次の分類（1）から（5）の分解に該当する英語の単語を2ヶ個以上、下の語彙の郡の中から選んで、英語で空所に記入しなさい。

1. 分類（1）

（1）語根複合語

{語根} + {語根}

（2）動詞由来複合語、

{語根 + 接尾辞} + {語根 + 接尾辞}

{語根 + 接尾辞} + {語根}

2. 分類（2）の「形容詞 + 名詞」

{語根 + 接尾辞} + {語根}

3. 分類（3）「副詞 + 名詞」

{接尾辞 (ly) + 語根} + {語根}

4. 分類（4）「動名詞 + 名詞」

{語根 + 接尾辞 (-ing)} + {語根}

5. 分類（5）「分詞 + 名詞」

{語根 + 接尾辞 (-ed)} + {語根}

語彙の群

- | | | | |
|--------------------------|--------------------------|----------------------------|----------------------|
| 1. integrated production | 2. finished goods | 3. assembly works | 3. visual inspection |
| 4. electrical engineer | 5. mechanical engineer | 6. production scale | 7. production loss |
| 8. production power | 9. operation improvement | 10. production allocation, | |
| 11. warehouse operation | 12. working period | 13. lot control | 14. working hour |
| 16. learning curve | 17. idle hours | 18. assembly line | |

Appendix 38

語彙テスト（接尾辞付き）

		英 語	日本語	品 詞
1	-ability			
2	-able			
3	-acy			
4	-aye			
5	-al			
6	-an			
7	-ance			
8	-ancy			
9	-ant			
10	-ard			
11	-ate			
12	-ate			
13	-ation			
14	-ativa			
15	-ator			
16	-ato			
17	-cy			
18	-crac			
19	-dam			
20	-ee			
21	-can			
22	-eer			
23	-ato			
24	-en			
25	-ence			
26	-enc			
27	-er			
28	-ery			
29	-en			
30	-ence			
31	-ese			
32	-et			
33	-ess			
34	-let			
35	-like			
36				

Appendix 39

第9回 語彙テスト語源と語彙の類似性

氏名：

問1 次の英語の意味に近い単語を下の語彙の郡の中から選んで、英語で空所に記入しなさい。

see	say	speak	write	paint
mount	sleep	pierce	run	call
cry	happen	light	fit	cut
cut	drink	push	take	

語彙の群

catch, press, slice, wound, suit, flash, rise, weep, shout, invite, rush,
stab, slumber, board, varnish, draw, tell, talk, watch

問2 つぎの語源に該当する英語の単語を2ヶ個以上、下の語彙の郡の中から選んで、英語で空所に記入しなさい。

- a. ラテン語の語源に関する語彙
- b. 北欧の言語の語源に関する語彙
- c. フランス語の語源に関する語彙
 - (1) 政治・法律に関する語彙
 - (2) 戦争・軍事に関する語彙
 - (3) 職業に関する語彙
- d. ギリシア語の語源に関する語彙
- e. オランダ語の語源に関する語彙
- f. イタリア語の語源に関する語彙
- g. スペイン語の語源に関する語彙

語彙の群

Negro, mosquito, alligator, cargo, ciga, opera, sonata, piano, deck, yacht, skipper,
dollar, smuggle, photography, telephone, cinematograph, phonograph, gramophone,
telescope, microscope, court, bill, council, tax, custom, mansion, prince, county,
city, village, butcher, barber, carpenter, cutler, draper, grocer, mason, miller, weaver,
battle, standard, banner, arms, lance, fortress, tower husband, fellow, knife, bank,
egg, race, skill, sky, window, law, wine, butter, cheese, pepper, kettle, silk,
copper, cup, kitchen, mill, mint

Appendix 40

語彙テスト

氏名：

次の英語の語根を含む単語を2ヶ個下の語彙の郡の中から選んで、番号で（ ）の空所に記入しなさい。

英語の語根

cord(心)	() ()	cult(耕す)	() ()	doc(教える)	() ()
du(2)	() ()	es(存在する)	() ()	fac,fec(作る)	() ()
dure(続く)	() ()	fam(話す)	() ()	fare(行く)	() ()
伽(終わり)	() ()	fen(打つ)	() ()	firm(固い)	() ()
flor(花)	() ()	form(形)	() ()	medi(中間)	() ()
fort(機会)	() ()	fund(底)	() ()	igen(生じる)	() ()
lgrad(歩み)	() ()	gram(文字)	() ()	lgraph(書く)	() ()
grav(重い)	() ()	hap(偶然)	() ()	jus(正義)	() ()
lect(集める)	() ()	loc(場所)	() ()	merc(商う)	() ()
miss,mit(送る)	() ()				

語彙の群

1.accord 一致する	29.cordial 心からの	2.culture 文化	30.cultivate 耕す
3.doctor 医師,博士	31.doctrine 主義	4.dual 2つの	32.duet デュエット
5.present 現在の	33.absent 欠席の	6.factory 工場	34.benefactor 恩人
7.durable 長続きのする	35.during 間	8.fame 名	36.famous 有名な
9.farewell さようなら	37.welfare 幸福,福祉	10.finish 終わる	38.final 最後の
11.offend 法を犯す	39.defend 防ぐ	12.firm 堅い	40.confirm 確認する
13.flower 花	41.floral 花の	14.deform 不具にする	42.inform 知らせる
15.fortune 運命	43.fortunate 幸運な	16.fund 資金	44.found 建設する
17.generate 生じる	45.genius 天才	18.grade 階級	46.gradual 徐々に
19.grammar 文法	47.telegram 電信	20.autograph 自署	48.photograph 写真
21.grave 重大な	49.gravity 重力	22.happen 起こる	50.happy 幸福な
23.just 正しい	51.justice 裁判	24.collect 集める	52.elect 選ぶ
53.locate 置く	26.mediaeval 中世の	54.meditate 中間の	27.commerce 商業
55.merchant 商人	28.mission 使命	56.missile ミサイル	

Appendix 42

英語学習のアンケート調査（2）

実施日：2004年6月28日

学部： _____ 学年： _____
 名前： _____

1. 単語の学習で複合語（例えばblackboardは黒板の意味であるがblack（黒色）+board（板）この2語がひとつに結び新しい意味の黒板としてblackboardが造られたことば）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
2. 単語の学習で派生語（例えば接頭辞over（上に）が語根coat（コート）に添加してovercoat外套の意味を表す。また、接尾辞-nessをkindに添加させてkindness形容詞から名詞に品詞を換える）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
3. 単語の学習でかばん語（例えばmotocarのmoにhotelのtelとくついでmotelのことば造る）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
4. 単語の学習で切株語（例えばtaxiの英語はtaximeter cabからtaxiの部分を取り取る）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
5. 単語の学習で頭字語（例えばUNESCOの英語はUnited Nation Education, Scientific and Culturalから各語の頭の文字の部分を取り取って造る）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
6. 単語の学習で語根、接頭辞、接尾辞を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
7. 英語の語根と日本語の部首を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
8. Saxon系とNorman系の語彙の特徴を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
9. 接頭辞による反対語（例えばdis-の接頭辞を付加して反対の意味を表す語）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
10. 単語の学習で類義語（例えばseeの意味に類似した語watch）種類を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
11. 専門語彙の構成が一般語彙から成り立つことを理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
12. 複合語として語彙の語根から「名詞+名詞」、「形容詞+名詞」、「副詞+名詞」に分類することを理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
13. Saxon系とNorman系の語彙や外国語の借用語（ラテン語、ギリシャ語、フランス語など）の特徴を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
14. 英語の語根と日本語の部首など類似性について日英比較で言語を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない
15. 英語の語根に接尾辞を添加させて品詞の変換（たとえば、動詞produceに接尾辞-tion添加させてproductionと名詞に変換させる）を理解しましたか。
 a.理解した b.少し理解した c.まだわからない d.わからない e.全然わからない

Appendix43

語彙習得の感想文

1. 今まで授業をやってきて、英単語は丸暗記するだけでは効率が悪くてダメなんだと実感した。私は今まで単語を丸暗記で覚えていたが、それだとテストは解けても、それが終わるとすっかり忘れてしまう。だが、接頭辞・接尾辞を覚えておけば、それに語根がついても大体の意味がわかるし、それまでの文章の流れから読み取れば、何を言っているのかが理解できるだろう。

単語を覚えることに比べると、英語の聞き取りは難しいと思った。ゆっくりと読まれるとわかるのだが、早く読まれると単語がさっぱり聞き取れない。例えば「Run away」だと「ランアウェイ」が「ランナウェイ」と、前の単語と後ろの単語がひとつの単語のように発音されてしまう。リスニングを頻繁に行って、自然と聞き取れるようにならなくてはいけないと思った。それと同時に、自分で発音する時も自然な発音になれるように練習したいと思った。good

2. 英語の学習を進めていく上で、確実に実力をつけるためには、『語彙』→『認知』→『ディクテーション』→『スピーチ』→『記憶』→『会話』の手順を踏まなければなりません。

語彙を認知的に理解して覚えるためには、ただ書いて意味を調べるだけで終わってしまっただけでは不十分です。いくら単語が書けても、聞き取ったり、話したりすることができなければ、理解したとはいえません。

それら不足分の能力を向上させるためには、ディクテーションならびにスピーチといった言語活動が必要になります。ディクテーションでは、たとえ一度ですべてを聞き取れなくても、繰り返し聞くことによって、少しずつ理解できる単語をだしていき、それらをパズルのようにつなぎ合わせることで最終的に文章を完成させることができます。そしてスピーチでは、単語の正確な発音方法を理解することができ、それにより語彙の数を増やしていくことができます。

単語の学習と同時に、これら二つの言語活動を行うことによって、理解が一層深まり、語彙の数も格段に増やすことができます。これらのことを繰り返し行うことによって、最終的には、実際の会話を行うことも可能になります。

これまでの私の英語の学習方法は、ただひたすら書いて丸暗記することのみでした。方法はそれ以外にないと思っていたし、それが一番の近道なのだとも思いながら学習してきました。なので、正直英語の学習はどちらかというと苦手で、今まで敬遠してきました。しかし、英語という言語を認知的に覚えようとするこの学習方法なら、英語の実力を向上させることができるのではないかと思います。

3. ディクテーションについて

英語を勉強していく上で僕が今までにやってきたことは、受験のために単語帳を開き何度も書くことを繰り返す、文法書等をみながら例文を暗記する、といったものだった。その方法で今までに何千語という単語を覚えてきた。だが、その方法で勉強した「英語」というのは実際に生活で使える内容のほうが多く、日常会話に英語を用いることなどまったくできない。ヒアリングの練習も多少はしたが絶対的な練習量が少なく、スピーキングにいたってはまったく練習などしたことはないのである。

この講義中で行っている「ディクテーション」をしながら思ったことは、やはり実用的な英語というものはしゃべることのできる英語だと思った。ディクテーションを繰り返し行うことでヒアリング能力が鍛えられ、しかも単語を耳で聞き書いて覚えるので非常に忘れにくい。何度も何度もディクテーションを行っていけば自然と語彙力も増していくだろう。僕自身英語を苦手科目としており、中でも単語の暗記が苦手だったが、ディクテーションをしながら単語を覚えていくことは苦痛ではないと思った。実用的な英語力をつけるための方法としてディクテーションは最もよい方法のひとつだと思う。

4. 今回のこのディクテーションをしてみて、かなり無理があるのではないかと思います。

それは、自分の中で英語はかなり苦手で、単語の意味を理解するのだけでも結構苦戦しているのにディクテーションのように聞いた英文を書き出す。ということを実際にできるのかと思ったからです。

実際にやってみてかなり、あたふたしてしまい三個くらいしか聞き取って書くことができませんでした。やっぱり無理だとそのときは思いました。そんな調子で何回か聞いてきました。そうするといつのまにか10個くらい書いていました。そして最終的には20個を超えていました。回数はかかりましたが慣れれば自分にもできるものだなと思い、少し楽しく感じました。

自分は中学のころから英語が苦手でここまで何とかして切り抜けてきました。しかし大学になって苦手だからということがもう通じないことに気づきました。思えば今まで自分の英語の勉強方法は単語を見て書いて覚えるだけであまり口に出したり、聞いたりといったことはしませんでした。その結果高校までに覚えたはずの単語は今結構忘れてしまっていてあの苦労はなんだったんだと少し自分に腹がたっています。

これまで、あまり聞いたりしなかったのは書くことと変わらないだろうと思っていたし、時間もそこまでなかったからだと思います。しかし、この授業で高橋先生のディクテーションの授業を行って、これからは英語を少しくらい聞き取れなくては絶対に就職などは難しいと思います。自分の日常の中でも英語が聞き取れたり話せることができたらどんなにいいかということを実感すると思います。自分の中ではこれはチャンスだと思います。今まで英語に興味がなかった自分が興味を持ち始めたわけですから。自分でも少しびっくりしています。

これから英語を勉強する上で勉強法をきちんと決めて勉強をしていきたいと思っています。その上で楽しく時には厳しくやっていかなければと感じつつあります。高橋先生には一年のころから英語を担当してもらっていますが、毎回の授業で新しい英語の勉強方法などをしてくれるので楽しいです。そして今回のディクテーションのようにその意味がわかったときはなんだか得したような気分にもなれます。

ディクテーションは今自分にあっているかはわかりませんが自分にプラスにはなると思います。だからこれからは日常の中で英語を少し気にして聴くことにしたいと思います。洋楽なども少し多めに聞こうと思います。

